



# 社会福祉協議会「椎名だより」 平成30年度 第3号 (通算21号)



発行者：千葉市社会福祉協議会椎名地区  
編集者：千葉市社会福祉協議会椎名地区 広報委員会  
代表 岡本 博幸 〒266-0021 千葉市緑区刈田子町 28

千葉市社会福祉協議会  
マスコットキャラクター  
ハーティちゃん



『これにしようかな』たくさん買っていたいただき感謝。



『日用品・台所用品』日々の生活に役立ちます。



『酒・ワイン・コーヒー紅茶』今夜はお酒で一杯。



『石鹸・シャンプー・入浴剤』予備が必ず役立ちます。



『米・乾麺・海苔』椎名のコシヒカリ・美味しいです。



『食器類・調理用具』再利用で重宝しています。



『手ぬぐい・タオル』施設の人に役立ちました。



『シーツ・下着・靴下』いくつかあっても重宝。

平成30年度・第30回椎名地区「福祉・コミュニティまつり」会場・椎名小学校  
椎名地区の善意の品物が集まりました。売り上げ 一〇六,三五五円。ご協力に感謝。

## 椎名城主・千葉胤光・椎名六郎 — 知略に長け・慈愛溢れる武将 椎名の誇り —

居城于下總國千葉庄椎名郷、此城爲堅固、大椎城（本城常兼）要害子城也。

『千葉大系図全』（発行編集者千葉開府八百年記念協賛会・大正15年6月1日発行）に千葉胤光・椎名六郎について右記の記載がある。

『千葉大系図』に二十九文字ではあるが椎名六郎の歴史的存在が記載されている。ここから、椎名城の武将・知将として世に知れ渡った人物であったことがわかる。二十九文字の中で注目すべきことは『此城爲堅固の要害城』という言葉である。鎌倉時代の城はかやぶきの館と言われるほどの物であり、用水路を兼ねた堀と土塁に囲まれ、数力所に楼門を配した防衛的なものであった。石垣を組んだ堅牢なものではなかった。

「此城爲堅固」とはどんな城であったのだろうか。椎名城があったという椎名の台地には形跡は何一つ残っていない。椎名六郎が築いた「堅固な城」の手掛かりはなく、手掛かりは、地形と地名そして『千葉大系図』からの文言を紐解いていくよりほかはない。

「椎名六郎」武将がどのような人であったかを考えてみたい。

### 第三代 千葉常兼卿と千葉胤光・椎名六郎

「常兼は常長の長子なり、寛徳2年（1055）8月15日誕生。

寛治年中（1087）父常長（43歳頃の参加か）と共に源義家に従い清原氏を征して功あり、下總上總常陸の守護職に任し従五位上に叙せらる。上総大椎に居りしを以て大椎権介と称す。

元永元年家を次子常重に譲り大治元年（1130）2月卒す。年八十二、法號を觀有昇淨院と大日寺に於いは之を千葉家の初代となせり。

子・常重・常家・常康・常廣・常衡・胤光あり、上総・廳南・天羽・角田・金田・大内・潤野・白井・匝瑳・鷲尾・飯高・湯浅・海上・椎名等の諸氏の祖となる。」

此処に常兼卿六男として「胤光」の名と「椎名」の名前が登場してくる。

一つの疑問として、子五人は全て父親の常兼卿の「常」を冠しての名であるが「胤光」だけが「胤」を冠している。「胤」は血筋血統を伝える意であり、事の発生の始まりの意である。「胤」を冠したことは新しい時代への常兼卿の思いであったのだらうか。第五代からは「胤」が千葉氏の象徴として世に広がっていくのであった。椎名城主六男に「胤光」と命名したことも歴史の繋がりを感ずる思いがする。

### 第四代 千葉常重卿と千葉胤光・椎名六郎

常重は常兼の長子なり。

永保3年（1083）3月29日誕生。元永元年（1118）に家督。

元永元年（1118）に家督を譲り受ける。下総権介に任じ正六位上に叙せられる。大治元年（1130）6月1日父常兼の遺命によりて長子常重千葉猪鼻城に移るり次子常家上總介に任じ、一宮柳澤城に居て両国の介を分任。常兼其の他の男子に等しく領地を受け世々常重の嫡家に属せしむ。世に常兼六黨と云う。

天永元年（1110）従五位下に叙される。保延元年（1135）2月累代の所領を嫡子常胤に譲る。

保延元年（1135）2月累代の所領を嫡子常胤に譲りて下総介に任ず。是に於いて常重を千葉大介と称す。爾来父在る時其子介に任せられるは、父を大介と號することを此処に始まる。常重致仕して老を養い治承4年5月卒す。

年九十八、法號を善應有照院と云う。

「常重人と爲り知勇にして慈善の心厚く、能く衆心を得て上下融和し家名大いに揚がる」と伝えられている。

### 千葉胤光・椎名六郎の環境と人間形成

『孟母三遷の教え』の格言がある。人は環境によって人間としての徳を培うという。胤光にとつてどのような環境のもとで人格形成されたかを辿ってみたい。

その第一は父常兼卿の影響である。父は房総の雄、上總下總の守護職として君臨していた。常兼卿がそれを維持していくには、それ相当の力量と手腕がなければならぬ。武芸だけでは家臣はついてこない。将としての学問の中。仏典等に秀でていなければならぬ。また諸国の情勢を把握する人間関係を構築していく能力がなくてはならない。

房総の雄として君臨し、鎌倉幕府を支える常兼卿としては、大椎城を守護するだけでは、千葉氏の存続と繁栄はあり得ないと考えていた。そのことが「嫡子常兼のほか他の男子には領地を授けその地の将とし常重を守護する」という策を行ったのである。大椎城の周りを強固にして盤石の態勢をとった。このことは当然の策であり、常兼卿としては千葉氏の永遠の繁栄と継承を願ったものである。

一地域の将として政を行うには、それ相当の武芸の力、学問の道を修めていなければならぬ。将が頼りなければ家臣、農民はついてこない。

常兼卿は子息六人に対して、武芸の鍛錬、学問の習得を日々日課としていたに違いない。各人はその力量を身に着けるため切磋琢磨し己の人間性を高めていったことだろう。

胤光とて例外ではない。六番目としてはそれぞれ兄弟たちの良きこと、悪しきこととの生き方を学んだに違いない。己の師となる兄を鏡として良き将となるよう努めたこととは、椎名城主椎名六郎となつてから武将としての大きな糧となつた。

椎名六郎の人間形成にとつて大事なことは将としての民意の掌握であった。城主たるものは「農民を大事にすることが大切」という考えである。常兼卿に「民戸富贍矣」の文言がある。意識としては「民の家々は生活が豊かで気力に満ち満ちている」と訳したい。

常重卿のなかには「常重人と爲り知勇にして慈善の心厚く、能く衆心を得て上下融和し家名大いに揚がる」とある。ここに常兼・常重の人間性が表出されている。人として具備すべき徳として次の事項を旨としていた。

「武芸を高め、事に当たつては知略ある行動ができる人間・知勇鍛錬」

「古今の書物に接し、学問に優れ徳のある人間・致道知行」

「佛を信仰し、慈愛の心でやさしく接する人間・慈善六道」

「家臣・農民であれ、人の声を聞き、分け隔てなく平等に接する人間・上下融和」

胤光と常重卿は常兼卿の教えを受け、城主としての心構えを身に着けていった。このことは千葉胤光・椎名六郎の人間形成の根幹となつていった。

## 千葉胤光・椎名六郎の人物像

長子常重が父常兼二十歳の時に誕生、永徳2年(1098)の誕生とすると、その後の五人の兄弟の生誕を2年の間隔を経て胤光の誕生となったと仮定したら、天仁元年(1108)となる。長男常重とは10歳前後の開きがあった。

胤光が椎名城主となったのは、15歳・天永3年(1113)に元服を行った後であろう。二十歳、永久3年(1115)椎名城主となったと仮定して胤光の人物像を想像してみたい。

父常兼卿は七十歳前後とみられまだ健在であり父としては可愛い存在であった。椎名城の城主となった胤光・椎名六郎。背丈160cm、顔はやや面長できりりとし、眼は優しさを帯び、鼻筋が通り、口元は山形真一文字であった。武将としては勇ましい面構えというより優しさを帯びていた。柔和な顔立ちの中に強さを秘めていた。

このような容姿は父常兼卿の血筋をひき、生育と共に人格形成されていった。

父常兼卿は日々の散策や城下巡りには、胤光を同行させて行つた。父は気さくな方で、家臣や農民の家に寄つては茶を飲むのを楽しみにしていた。いつも縁台での雑談であった。なにげない話の中に人々の気持ちを探しそれを政に生かしていた。村人との上下融和の一環であった。「戦いは城が戦うのではない。戦いは人が皆である」というのが常兼卿の持論であった。村人を大切にすることは千葉氏の繁栄の石垣であると思つていた。胤光は父の行動から多くのことを学び取つていた。

武士とは華やかさと諦めの両方を兼ね供えた一面を持つていた。多くの武人は死に対しては諦の境地であった。戦いは常に死が同居していた。戦いにおいて刀で切られたり、槍で刺されたり、矢で射られ死に至ることは恐ろしいことであった。しかし戦わなければならぬ宿命を持つていた。

生き延びるためには佛の加護を願つていた。戦いは「殺すか殺されるか」の一つである。もし戦死したら極楽浄土に導いてもらいたいのが武士としての最大の願ひであった。そのためには佛の加護に頼るしかなかった。

武士たちは佛に対しての信仰心は皆深かった。戦いにおいては将であれ、下級武士であれ、農民であれ、死に対しての思いは佛の力を借りるしかなかった。彼らは皆、到彼岸のため六波羅密の修行をし、日々身を浄めていた。

常兼卿が「慈善の心厚き人」と言われたのも、根底には佛の信仰があったからである。そのため武將は寺社を建立し、大日如来を祀り、祈りを捧げていたのである。胤光も幼少時から信仰に対して強い影響を受けていた。このことは将となった胤光の人間形成に大きな影響を与えた。胤光は城主として、家臣や農民の命を大切にすることに、戦いにおいては死者を出さないことを第一に考えていた。それが将としての最大の努めであるという信念であった。

これらのことを秘めた人物が千葉胤光・城主椎名六郎であった。

## 椎名城此城爲堅固の「堅固」とはどんな城であったのか

「堅固」とは、「頑丈で、堅牢。攻め落とされぬ城の意」である。椎名城が「堅固」であった。と言つても椎名城が存在したという礎石や遺構は何一つ残っていない。古文書もない。記述を一切見ることがない。何故『千葉大系図全』に「千葉庄椎名郷 此城堅固」とあるのか不思議である。

系図に「堅固」と言わしめた記載がされているのは、それなりの要因があったからである。この時代の城は、堀を巡らし簡単な堀で囲み、中に茅葺の家が何軒か建つていたものであった。石垣を築いた本格的な城郭ではないと考えるのが当然である。

「堅固」として考えられるのは椎名六郎が「戦略家」であったことである。「大椎城の要害」「猪鼻城の要害」としての椎名城が存在するということだけでは「堅固」とはならない。椎名六郎が城主として外部の敵と対峙し、力の存在を知らしめ、相手が認めた時初めて「椎名城は堅固」となるのである。「強い弱い。堅固・貧弱」とは自分が決めることではない。事に対して優位に立つ、勝利を収める、配下に収める、という事がない限り「堅固」とは言われないだろう。

その事実・事象とは何であったのだろう。「大椎城の要害」としての椎名城であるからには、この城への敵の侵入を防ぎ堅守しなければならぬ。とすれば、戦いに勝利したことが考えられる。

母親からは「刈田子の勝負谷にてすごい戦いがあつた」ということを聞かされていた。小学生の頃であつたので、歴史に対しての興味関心は無かつた。今に思えばもつと聞いておけばよかつた、と残念に思つている。

ここ一帯は湿地帯であり菖蒲の群生地であつた。この地が勝負谷と呼ばれるようになったのは千葉胤光がここで椎名六郎城主になってからである。大椎城にも要害の一つとして、大椎城の入り口村田川下流の谷津に「勝負谷」の地名が残っている。胤光は幼少時から「勝負谷」が地形として戦略的にどんな役割を果たすのか教えられていたに違いない。

「堅固」が城郭の作りではないとすると、「堅固」とは何であつたのか。それは武士団と刈田子郷の農民(兵士)の結束であつた。それと戦いを指揮した椎名六郎の戦いの知略であつた。椎名六郎は「戦いは城がするものではない。戦いは人である」という信念を持つていた。「城は粗末でよい。城まで攻め込まれたら戦いは負けである。城まで来て戦うのではなく、それ以前に決してしまうのが戦いである」ということを第一に考えていた。知略を重ね、いかに人を動かすのかを考えていた。人の絆が城の石垣であつた。

椎名六郎の戦いは奇襲的であり、緻密な戦略の上に展開された。その結果・成果を上げ、名を挙げていった。「椎名城が堅固」とはまさしく人の絆であつた。一戦ごとに名声は上がりその戦いぶりは、源頼朝のところまで届き、「椎名郷に名將椎名六郎」ありと言われるようになり、「千葉大系図」に「椎名城は堅固也」それは人が城の石垣であつた。「椎名城は堅固也」と系図に二十九文字との一文が残されているのはその所以であろう。



『ノート・鉛筆等』みんなおまけ。勉強してね。



『子供用品』これもあれも嬉しい。校長先生ありがとう。



『調味料』これで味も一段とアップ。家族円満。



『油・醤油・砂糖』毎日のこゝとで助かります。



『あんしんケアセンター』10歳若返った？取・脳年齢検査』検査で安心。



『甘酒・野菜』手作りの甘酒は特別。

★椎名地区 町丁別高齢者の人数と割合

(平成31年3月31日現在)

町丁名	総人口	65歳以上		75歳以上	
		人数	割合	人数	割合
大金沢町	179	41	22.9%	25	14.0%
落井町	186	71	38.2%	38	20.4%
刈田子町	462	119	25.8%	70	15.2%
小金沢町	46	14	30.4%	7	15.2%
椎名崎町	843	184	21.8%	91	10.8%
富岡町	113	32	28.3%	21	18.6%
中西町	475	85	17.9%	52	10.9%
古市場町	2,255	555	24.6%	251	11.1%
茂呂町	382	90	23.6%	43	11.3%
合計	4,941	1,191	24.1%	598	12.1%

【参考】

緑区全体の高齢者の割合 …22.1% (65歳以上)  
 10.6% (75歳以上)

市全体の高齢者の割合 …25.8% (65歳以上)  
 13.0% (75歳以上)



『お昼の豚汁』手作り味、大満足、もう一杯お代わり。



『わけあり』掘り出し物がありました。再利用で一役。